消防大学校だより

消防団長科における教育訓練

消防大学校では、消防団の上級幹部に対し必要な知識及び能力を修得させることを目的として、総合教育「消防団長科」の教育訓練を実施しています。

令和2年度は､第77回（9月7日から9月11日まで）が14名、第78回は（11月9日から11月13日まで）15名、合計29名の学生が5日間（教育時間30時間）の教育訓練を修了し卒業されました。

消防団長科の受講者は、各地域において消防団の災害活動及び運営に携わる一般職の方々です。普段は自分の仕事を持ちながら消防団の活動に従事されており、新型コロナウイルスの感染拡大が危惧される中、消防団のさらなる発展のためにと、全国各地から入校を希望され地域性の異なる方々が共に学ぶ場となりました。

講義では、近年の消防団情勢や災害事例に関する講義のほか、校外研修では日本消防協会の秋本会長による消防団幹部としてのあり方についてのお話を伺い、あらためて地域が求める消防団の姿や自らの職責について認識したところです。

また、消防庁では長官講話を始め、消防庁幹部による最新の消防団情勢に関する講義のほか、消防団を中核とした地域防災力の充実強化に向けた重点取り組み事項に対するポイント、現在の消防団の現状による課題と対策や災害時の活動事例、さらには、加入促進や処遇改善、財政措置、安全管理等について説明がありました。

実科訓練として、指揮シミュレーションで図上訓練等を実施し、消防団幹部が知るべき常備消防との連携や団員の安全管理、そして災害現場全体を見ることの重要性を理解し、実際に火を燃やして行う実火災体験型訓練では火災の性状について学びました。

そのほか、他の講師からは具体的な消防団活動や教育訓練として、協力事業所の拡充や、学生団員確保などの講話、女性消防団員にしか出来ない活動、女性消防団員にも出来る活動等、新しい時代に即した消防団のあり方を学びました。

事例発表や課題研究においては、持ち寄った課題等について意見交換がなされました。

発表にあたっては、他の地域の実情や取り組みを聞くことにより様々な点から思考する機会となりました。

研修を終えた学生からは「これからの消防団の進むべき道について学ぶことができた」「消防団幹部としての姿を見直すことができた」等の意見が多く挙げられ、更には学生相互の情報交換により、学生全員から「大いに相互啓発の場になった」との回答を得ました。

指揮シミュレーション訓練

実火災体験型訓練

課題研究発表

今後、消防大学校で修得した知識・技術・情熱をそれぞれの地域で発揮され、地域住民の負託にこたえるとともに、消防団の発展に向けて大いに活躍されることを期待しています。

救急科における教育訓練

消防大学校では、専科教育において、救急隊長及び救急業務に従事する指導・監督的立場にある職員に対し、高度の知識と技術を総合的に修得させ、指導救命士及び救急業務の幹部としての資質を向上させる事を目的に「救急科」を設置しています。

本年度の救急科第82期は、全国から集まった47名が訓練の企画及び運営方法の習得、幹部職員としての必要な知識の習得、各地域での取り組みや課題についての情報交換などについて、課程全般において学生が主体となって自ら考え実践する教育訓練を9月23日から10月22日までの30日間にわたり実施し、全員が必要な課程を修了し卒業しました。

今回は、救急科において実施した「多数傷病者対応訓練」と「技能管理(訓練運営)」について紹介します。

1　多数傷病者対応訓練

シミュレーション訓練

実動訓練

多数傷病者事案に関する講義（2時間）、シミュレーション訓練（3時間）及び実動訓練（4時間）を通し、多数傷病者事案に対する活動全般の流れを確認するとともに、医療資源や地域性等が異なる消防本部の学生が合同で訓練を行い、検討会等で意見交換することにより自身のスキルアップはもちろんのこと、得られた知識・経験を各所属に持ち帰り地域住民の安心安全につなげることを目標として、幹部科、警防科、救助科、救急科において、多数傷病者対応訓練を実施しています。

救急科第82期の多数傷病者対応訓練は「路線バスと普通乗用車の事故による多数傷病者事案」という想定で机上訓練を3回、杏林大学からDMAT医師、看護師及び事務員に参加していただき実動訓練を2回実施しました。

消防とDMATが同時に訓練することにより、災害現場における医師との連携について具体的な訓練を実施できました。

各訓練終了後には検討会において、DMAT医師からの医学的なアドバイスを聞くことができました。

また、学生間では「このような大人数で多数傷病者対応訓練を実施する機会がなかったため参考になりました」「机上訓練ではできていたのに、実動訓練ではまったく思うように動けず、実際に訓練を行う重要性を再認識しました」「自分の本部での訓練方法の改善につなげていきたい」等の積極的な意見交換が行われ、現場における指揮能力、部隊運用、トリアージ対応能力の向上に努めました。

2　技能管理(訓練運営)

訓練の様子

検討会の様子

この訓練では、生活班とは異なる地域を越えたメンバーで訓練班として6班編成し、各地域の特色や訓練方法について意見交換を行いながら、時間管理や検討会運営を含め、各班が作った想定で実施しました。

検討会を含めた訓練全体を評価する班を設定し、全体を評価。さらにその評価を含めた全てについて救急救命東京研修所の徳永教授と支援教官2名が評価しフィードバックを行うという指導救命士制度の骨子である屋根瓦方式の教育を実践しました。

終了後のアンケートでは、「各本部でプロトコールが違う中、学生同士で検討し、有意義であった」「指導する者を評価する形式で訓練を行ったことは無かったので、斬新で非常に面白い教育技法だと感じました」等の意見があり、所属に帰ってから各種訓練に有効に活用していただけると考えています。

救急科第82期を卒業した学生は消防大学校で修得した高度な知識・技術に加え、全国の仲間たちとの絆を活かして情報交換をし、各所属で幹部職員として救急業務に取り組むなど様々な場面での活躍が期待されています。

問合わせ先
消防大学校教務部
TEL: 0422-46-1712